

『源氏物語』 薫の「知らず顔」再考

岸 ひとみ

〔要旨〕『源氏物語』横笛巻において、柏木の一周忌を迎えた

折、光源氏が柏木を哀悼し供養する場面で、「よろづも知らず顔にはけなき御ありさまを見たまふ」と記されている。薫が

「知らず顔」であるとし、その対象は「よろづも」とあるように、実父である柏木が亡くなり、自分が女三の宮の密通によっ

て生まれたという一切の事情である。この「知らず顔」は、

「知らない様子」と訳されているが、字義的には、知っているのに知らないふりをするという意味である。『源氏物語』の

「知らず顔」の用例を調べると、人に対しては、すべて「知らぬふり」という意味であるのに、なぜ薫にそれとは異なる意味

で「知らず顔」という表現が使われたのかを考察した。

他者が「知らず顔」とする場合は、他者自身の意識が、根底にある。「知らず顔」の主体が人以外の場合は、「知らない様子」と解される場合もあるが、それも人と同様に「知らぬふ

り」とするべきである。

横笛巻も、源氏が薫を「知らず顔」と「見たまふ」ことから、そう思う人の意識が投影されているので、何も知らない薫ではなく、「知らぬふりをしている」という源氏の思いと解すべきことを論じた。

源氏は、以前は薫を柏木に似ている不義の子と見ていたが、柏木と切り離して薫を見つめ、独立した存在であるという意識に変わった。続く「いみじくあはれなれば」は、薫自身に対する思いであり、源氏の死後、真相を知ることになる未来の薫を重ねて、知らぬふりをしていると感じたことと解釈したい。

薫の「知らず顔」は、「知らない様子」ではなく「知らぬふり」と解することで、薫の将来を予言し、薫の主人公性を付与する語句なのである。

〔キイワード〕源氏物語、知らず顔、他者

はじめに

横笛巻において、柏木の一周忌を迎えた折、源氏が柏木を哀悼し供養する場面で、次のように記述されている。

御はてにも、誦経などとりわきさせたまふ。よろづも知らず顔にはけなき御ありさまを見たまふにも、さすがに
いみじくあはれなれば、御心の中にまた心ざしたまうて、
黄金百両をなむ別にせさせたまひける。

〔『新編日本古典文学全集』横笛巻三四五頁〕

薫が「知らず顔」であるとし、その対象は「よろづも」とあるように、実父である柏木が亡くなり、自分が女三の宮の密通によつて生まれたという一切の事情である。この「知らず顔」は、「知らない様子」と訳されているが⁽¹⁾、字義的には知っているのに知らないふりをするということである⁽²⁾。歌語としても同義といえよう⁽³⁾。

『源氏物語』における「知らず顔」の用例のうち、人が主体であるものは、これ以外はすべて「知らないふりをする」となっている⁽⁴⁾。また、『源氏物語』より前の作品で、「知らない様子」という「知らず顔」の用例は見当たらなかつた⁽⁵⁾。後の作品では、『とりかへばや物語』と『栄花物語』で、人に対して「知らない様子」の「知らず顔」を各一例確認できたのである⁽⁶⁾。

もちろん一歳になつたばかりの薫が、知らないふりなどきようはずもない。しかし、「知らない様子」とされる「知らず顔」には、それだけにとどまらない意味があるのではないだろうか。この部分は、源氏が薫を「知らず顔」と「見たまふ」となっていることから、源氏がなぜ薫を「知らず顔」と意識したのか、そこに隠された源氏の思いを読み取るべきであろう。

そこで『源氏物語』の「知らず顔」の用例のうち、まず、「知らないふりをする」という「知らず顔」において、他者が、「知らず顔」と意識する場合を取り上げ⁽⁷⁾、次に、人以外が主体の「知らず顔」を検討したい。

一、他者からの「知らず顔」

他者が「知らず顔」としている場合は、ほとんどの者が「知らず顔」と思わないにも関わらず、知らないふりをしていると意識している。なぜ「知らず顔」だと思うのかをpushしておく必要がある。そこで、本章では、他者が、「知らず顔」としている用例のうち、心内文の三例を取り上げる⁽⁸⁾。

①また気色に出だすべきことにもあらずなど思し乱るるにつけて、故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、

(若菜下巻二五五頁)

これは源氏の心内文で、女三の宮と柏木の密通を知って、二人に怒りを募らせる場面である。その中で、「故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ」と、

「む」と、源氏は桐壺院のことを思い起こし、藤壺との密通を存じていらつしやうて、知らぬふりをされていたのではないかと思っている。生前、桐壺院は密通に気づいておられるのではないかと、源氏が意識したことはなかった。冷泉帝に秘事が漏れたことを知り、王命婦に問い質した時でも同様であった。

源氏は、女三の宮の密通を知って、初めてそういう意識を持った。密通を知ったときは、その証拠となる手紙の主である柏木に対し、次に女三の宮に怒りが向けられた。二人を指弾する描写の後に、「気色に出だすべきことにもあらずなど思し乱るるにつけて」と、感情を表に出すことはできないと苦悩する中で、桐壺院のことが想起されている⁽⁹⁾。

密通の加害者であった源氏が、被害者となることで、桐壺院の「知らず顔」を意識したことから、他者が「知らず顔」を意識するのは、「知らず顔」をしている本人ではなく、そう意識する他者自身の問題といえそうである。

②世もいと定めなし、宮も亡せさせたまはば、御服あるべきを、知らず顔にてもしたまはむ、罪深きこと多からむ、おはする世に、このことあらはしてむ、

これも源氏の心内文で、「知らず顔」の主体は玉鬘である。大宮が亡くなれば、本来玉鬘は喪に服さなければならぬのに、知らぬふりでいるのは罪深いだろうと、源氏が意識している。源氏がなぜそう思ったのかといえ、玉鬘は源氏の娘とされているが、実は内大臣の娘で大宮の孫にあたるからである。

玉鬘に出仕や結婚の話があり、早急に裳着の儀式をする必要が出てきた。今のところ、その事実は世間に知られていないが、隠し通せるものではない。そこで、源氏は素姓を明確にしておかねばならないと考えて、裳着の儀式で内大臣の娘であることを公表しようと決心し、内大臣に腰結役を依頼したが、断られたということが、このすぐ前に記されている。

玉鬘の実父を公表することについて、この時点では源氏の心の内に留まっている。源氏の娘として裳着の儀式を行うのであれば、内大臣の娘ではないので、玉鬘は大宮が亡くなっても喪に服すべきではない。喪に服すべきという前提があつてこそ、それができないゆえに「知らず顔」になる。ゆえに、源氏の娘として儀式を行う場合には、源氏に「知らず顔」にてもものしたま

はむ」という意識は生まれまいであろう。

これらから、源氏が玉鬘の実の父を公表しようという意識に変つたことによつて、玉鬘に対して「知らず顔」という語句が使われたといえよう。

③おのがじしは、この人どもも、我あしとやは思へる、後手は知らず顔に、額髪をひきかけつつ色どりたる顔づくりをよくしてうちふるまふめり、

(総角卷一八〇頁)

これは大君の心内文で、年配の女房達が自身の後ろ姿を「知らず顔」であるとされている。年配の女房達は「我あしとやは思へる」と、自分が老いて醜くなつてきたとは思っていないが、一方で、「額髪をひきかけつつ色どりたる顔づくりをよくして」と、老醜を隠すために顔を隠し厚化粧をしているようにと、見られている。女房達は、「知らず顔」をして醜くなつてきたことを知らぬふりをしており、老醜を自覚している一方でごまかせるという思いを持ち、それに気づいたことを知られたくないと思つてしていると、大君は感じている。

この直前に、「姫宮、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、痩せ瘦せになりもてゆく」(総角卷二八〇頁)と記述されているので、これは大君の思いでもある。女房のことをこのように評しているが、実は自分にも同じことが向けられている。大君は自分自身の容色の衰えを感じるようになったからこそ、女房の後ろ姿を「知らず顔」と意識した。

以上により、他者が「知らず顔」としている場合は、そのように思う他者自身の意識が根底にあるといえよう。

二、人以外の「知らず顔」

本章では、人以外が主体の「知らず顔」の用例を取り上げる。主体が「知らぬふり」ができない動植物であっても、「知らず顔」と意識しているのは人であり、その者の意識がどうであるか見ていきたい。

④かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覽ず。

植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来ゐる

鶯

と、うそぶき歩かせたまふ。

(幻卷五二八頁)

紫の上亡き後、源氏の悲しみは癒えず、庭に咲く形見の紅梅に鶯がやってきて鳴いており、その時に源氏が歌を口ずさんだ。「知らず顔」の主体は鶯で、「花のあるじもなき」と、主である紫の上もないことを「知らず顔」だとしている。「知らず顔」は、『新編全集』では、「知らぬ顔」と訳しているが、「知らない様子」としているものもある⁽¹⁰⁾。

「鶯のはなやかに鳴き出でたれば」は、『新編全集』では「鶯が楽しそうに鳴きたてるので」とされている。鶯が集まってきた所は、「母のたまひしかば」とて、対の御前の紅梅とりわきて後見ありきたまふを」(幻卷五二八頁)と、紫の上が匂宮に大切にしたいと頼んだ紅梅である。紫の上の愛情が込められた紅梅に集う鶯は、紫の上の生前の頃と同じように鳴いているので、「知らず顔」となる。鶯が紫の上の死を知らないからか、知っているのに知らないふりをしているのか、文字面からはどちらの解釈も可能である。この後に「御前のありさまい

にしへに変わぬを、めでたまふ方にはあらねど、静心なく、何ごとにつけても胸いたう思さるれば」(幻卷五二九頁)とされ、源氏は紫の上が亡くなり、自分の気持ちとは異なつて変わらぬ自然を前にして、辛く思っている。

⑤植ゑし人なき春とも知らず顔にて常よりもほひ重ねたる
こそあはれにははべれ」とのたまふ。

(幻卷五三三頁)

これは、紫の上が亡くなった後に、源氏が女三の宮のもとを訪れ、庭先の山吹が美しく咲いている様子を見て、女三の宮に話しかけた場面である。「知らず顔」の主体は山吹で、源氏は「植ゑし人なき春とも知らず顔にて」と、『新編全集』では、「あの花を植えた人もいない春とも気づかぬらしく」とされているが、ここでも「知らず顔」の語釈が分かれている(11)。

源氏の言葉であるので、「知らず顔」は源氏からの視線である。「知らず顔」と感じるのは、「常よりもにほひ重ねたる」と、山吹がいつもより美しいからである。植えた人が亡くなったことを山吹が知っていれば、悲しくて美しく咲くことができ

ないであろう。知らなければ、また知ついても知らないふりをするのであれば、美しく咲くことができる。

両用例共に、源氏が紫の上を偲んでいる。以前紫の上と共に眺めた鶯や山吹は変わりが無いのに、紫の上がいないことで源氏は寂しく深い悲しみの中にあり、自分の気持ちが全く変わってしまったので、「知らず顔」と感じているのである。「知らず顔」をどう解するかによつて、源氏の思いが異なつてくるであろうが、この点は後述する。

⑥例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし。秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを、

(総角卷二五七頁)

これは、薫が大君に片枝の紅葉を付けて手紙を寄こした場面である。「知らず顔」の主体は「青き枝」で、『新編全集』では、「秋のけしきも知らず顔」を「秋の風情も知らぬ体」としているが、「知らぬふり」となっているものもある(12)。知らない様子であるのは、枝が青々としているためである。

「秋のけしきも知らず顔」と感じているのは大君である⁽¹³⁾。大君は、薫の相手には自分ではなく中の君をと思い、自分の気持ちを押し殺していた。昨夜、薫は大君と中の君が共にいる寝所に忍んで来たが、大君は逃げて中の君が薫と結ばれるようにしたにもかかわらず、薫から自分あてに手紙が来た。それに対して「例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし」と、意外にも嬉しいとして、そう思う気持ちを矛盾していると思っ
ている。大君は薫を避けたにもかかわらず、今は薫の手紙を嬉しく思い、気持ちが変化している。「知らず顔」という表現の奥に、大君の思いの変化が存在する。

以上三例は、人以外のものが主体であるが、「知らず顔」と感じる者の意識の変化が認められた。人に対する「知らず顔」は、知らないふりをするという意味であるが、人以外のものに対しては、「知らない様子」と「知らぬふり」と二通りの語釈があった。用例④と⑤は同じ日で時間が継続しており、共に紫の上を偲ぶ源氏の思いが込められているので、「知らず顔」の語釈が異なっているのは、用例④の歌の解釈によるであろう⁽¹⁴⁾。

主体が、知らぬふりができない動植物であるとしても、「知らず顔」と見ているのは人の方である。他者が「知らず顔」を

意識する場合は、「知らず顔」の主体ではなく、そう意識する他者自身の問題と既述したことから、人以外の「知らず顔」も、人の場合と同様に、「知らぬふり」と解すことができそうである。

三、人以外の「知らず顔」の語釈

本章では、人以外の「知らず顔」の語釈をどう捉えるべきかを見ていきたい。『源氏物語』よりも後のものであるが、次の歌を取り上げる⁽¹⁵⁾。

⑦今はただ心のほかに聞くものを知らず顔なる萩の上風

〔新古今集〕巻第十四恋四 一三〇九 式子内親王

「知らず顔なる」の主体は「萩の上風」で、「今はただ心のほかに聞くものを」という上句を受けて、自分の心の変化を「知らず顔」だとしている。「今はただ」と、以前と違って恋人の来訪を待っていた頃は、「萩の上風」で恋人が来たのかと思ったが、今は待つことを諦めたので、ただの自然の風である。「萩

の上風」を擬人化して、自分の気持ちに「知らず顔」である風を冷淡で無情だと感じている。

この「知らず顔」も、「知らぬふり」、「知らない様子」と二つの解釈があり、論が分かれている(16)。奥野陽子氏は「知らない顔」と解し、無生物に「知らず顔」が使用された場合は、「実際に知っていて知らぬふりをしているのか、知らぬから知らない顔なのか、どちらにしても、その知らないことに或る非難がましい、恨めしい感じをもって使われることも多い」と論じられている(17)。

人以外が主体となる場合は、詠み手がそれを人に見立てて「知らず顔」と感じている。そうであれば、人に対するのと同じように「知らぬふり」と解することができ、「知らない様子」とする必然性はない。「知らない様子」であれば、自分の気持ちが変わらないということが恨めしい。しかし、「知らぬふり」の場合は、意図的な行為であり、そんなことをするものに対して恨めしい。両方で恨みの対象が異なり、「知らぬふり」の方が、相手に対する思いがストレートとなる。

「荻の上風」の「知らず顔」を「知らぬふり」と解すると、「荻の上風」に対する恨みは、知らないことに対するものでは

ない。自分の気持ちを知っているのに知らん顔をしている「荻の上風」に向かい、詠み手の情念が際立ってくるであろう。

他の和歌でも、「知らず顔」の解釈は両方存在するが、すべて「知らぬふり」とすべきである(18)。

そこで、人以外が主体の場合も、「知らず顔」は「知らない様子」ではなく、「知らぬふり」という意味で解釈できることを踏まえて、前章の人以外が主体の「知らず顔」の用例をどう解釈すべきか見ていきたい。

用例④・⑤は、「知らない様子」であれば、自分の気持ちと対比して知らないことを恨めしく思う。「知らぬふり」とすると、榮しげに鳴く鶯と美しく咲く山吹を擬人化して、紫の上の死を知つていながら知らないふりをして自分の気持ちに共感してくれず、源氏の絶望感や孤独感はより強いものになるであろう。

⑤の用例の源氏の「あはれにはべれ」は、知らないなのであれば、新編頭注で、「主を失ったとも知らず精一杯美しく咲く。深い感慨をおぼえるゆえん」とされ、知らずに健気に美しく咲いていることに、「あはれ」と、生命感のある山吹への感動の思いとなる。しかし「知らぬふり」であれば、美しく咲いてい

る山吹そのものに対して恨めしく、山吹が自分の思いに寄り添ってこないことで、自分が「あはれ」と、寂しさや辛さを感じていることになろう。この部分は女三の宮への言葉であるので、表面上は「知らない様子」であるとして、山吹の美しさを愛でているかのようにみせかけているのであろう。「知らぬふり」と解することで源氏の心の内を読み取ることができる。

⑥について、「知らない様子」であれば、表面に現れた青い枝の状態となる。しかし、「知らぬふり」であれば、大君の気持ちが入ってくる。枝に自分と妹を掛け、青い方は大君であるので、薫への自分の気持ちを表に出さずに知らないふりをしていくことになろう。

「知らず顔」には、そう思う人の意識の変化がある。以前は何とも思わず眺めていた同じものが、自分の気持ちの変化によって「知らず顔」と見える。自然に存在するものを擬人化して、それに自分の思いを込めているので、「知らない様子」とするよりも「知らぬふり」と解すべきである。

このように人以外が主体となった場合も、「知らず顔」は「知らぬふり」とすべきであり、そう意識する他者の思いが主体そのものに向かうことになる。

四、薫の「知らず顔」

横笛巻の「よろづも知らず顔」は、薫が何も知らない様子と訳されていることを冒頭で述べた。しかし、前章で「知らず顔」は、すべて「知らぬふり」と解釈すべきだと結論づけたことから、赤子の薫が知らぬふりができないにも関わらず、なぜ源氏は、薫が知らないふりをしていて意識したのかを考察する。

「知らず顔」という語句には、そう思う者自身の意識の変化が関わっていることを既述したので、源氏にどのような心の変化が生じているのか見ていきたい。

源氏は、薫が柏木に似ていることをすでに意識していた。五日のお祝いの時に、「大将などの児生ひほのかに思し出づるには似たまはず。女御の御宮たち、はた、天帝の御方さまに、王氣づきて気高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず」（柏木巻三三三頁）と、夕霧や明石の女御腹の宮を思い出して、薫と異なることを感じている。続いて、「いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなど

をいとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとうおぼえたりかし」(柏木卷三三三頁)とあり、薫の顔を見て愛おしく思っており、薫が柏木に似ているという意識を持っている。次に、「あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに」(柏木卷三三三頁)として、柏木に意識が向かっている。

さらに、「まみ口つきのおつくしきも、心知らざらむ人はいかあらむ、なほ、いとよく似通ひたりけり」(柏木卷三三四頁)と、再び薫が柏木に似ているとして、「親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむ」(柏木卷三三四頁)と、柏木の親に意識が移っていた。

このように以前は、薫が誰に似ているのかという意識の中で薫を見つめており、柏木に似ていることで、薫が自分の子ではなく、柏木の子であることを痛感させられ、薫から柏木や柏木の両親に意識が向かったのであろう。

それに対して、この場面では、源氏は薫を見て初めて、「知らず顔」という意識を持ち、「いみじくあはれ」と思っている。ここで柏木に似ている薫から柏木に意識が向かうことはない⁽¹⁹⁾。薫に対する「いみじくあはれ」とは、柏木が亡くなったことも知らない薫の様子に対する気持ちとされてきた。しか

し、「知らぬふり」と解すると、「いみじくあはれ」の対象は、薫の様子ではなく、「知らず顔」の主体である薫自身となる。ここでは、源氏は薫を見つめて、意識はそこに留まっております。以前とは異なっており、薫は柏木と切り離されている。

次に、なぜ薫が「あはれ」なのか、源氏の視点から見ていく。「いみじくあはれなれば、御心の中にまた心ざしたまうて、黄金百両をなむ別にせさせたまひける」と続いて、薫の分として黄金百両を別に寄進していることが記されている。これは実父柏木の死を知らない薫のためである。源氏は何も知らない薫に対して、知らぬふりをしていと思うことから、今は知らないが、いつかは自分の誕生の真相を知ってしまうのではないかという意識を持っているのであろう⁽²⁰⁾。柏木が死に際に遺言をして手紙を残したことによって、将来、薫は柏木の子であることを知らされる⁽²¹⁾。

ゆえに、これは源氏の薫の将来に対する暗示である。源氏が亡くなった後、薫が真実を知るようなことになれば、どれほどの思いを持つであろうかと心中を推し量って、源氏は「いみじくあはれ」と感じたともいえよう。

この点について、倉田実氏は「よろづも知らず顔」とする

指示の仕方自体、いつかは知るということを内在させているわけであり、無心無垢な薫の表情は、そうであるがゆえに光源氏の内面に「あはれ」を去来させる」として、「薫の顔は（略）続篇を予感させている」と論じられているが⁽²²⁾、本稿では、薫の「知らず顔」が「知らぬふり」という意味であることから論じた。

薫が柏木の死を知らないから不憫なだけではなく、不義の子として生まれて、いつか真実を知るかもしれないという運命を背負うことになった薫が哀れだ、とも思っているのである。源氏は未来の薫も見つめている。

薫の将来に対する予言について、先行研究では、この場面より後の、薫が欄子に盛られた筍に興味を示した次の描写に注目している。「今よりいとけはひことなるこそわづらはしけれ。女宮ものしたまふめるあたりにかかる人生ひ出でて、心苦しきこと誰がためにもありなむかし」（横笛卷三五〇頁）とし、さらに「御函の生ひ出づるに食ひ当てむとて、筍をつと握り持ちて、雫もよよと食ひ濡らしたまへば、「いとねぢけたる色（このみかな）」とて」（横笛卷三五〇頁）とされている。

手塚昇氏は、前段部分について、「註釈書の中には、この辺

の事を、薫があまり美しいので源氏が冗談を言ったのだといったりしているが、この辺は冗談どころでなくて、薫の生涯に対する予言的伏線を張った重要な部分である」とされている⁽²³⁾。これに対して、仁平道明氏は、「予言的伏線を張った」とされた箇所について疑義を呈され、「いとねぢけたる色好み」という言葉は、単におきな子の薫についてだけ言われたものではなく、（略）続篇の薫の姿を予告するものだったのだろう」と⁽²⁴⁾、むしろ後段部分であると述べられている。

共に、密通を犯した柏木の血を受け継ぐ薫に、成長後の好色性を予見することから、将来への予言とされているが、この部分よりも前の薫の「知らず顔」において、源氏が未来を暗示している。源氏自身も幼き頃、高麗人の相人に未来を予言されていた。

また、「今より気高くものものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ」（横笛卷三四九頁）という記述があり、源氏は薫が自分に似ていないこともないと思っている⁽²⁵⁾。源氏は今までも薫の器量が抜きん出て優れていることは意識に上っていたが、初めて薫が自分に似ているような思いを持っている。

以上の点から、薫が源氏を受け継ぎ、源氏亡き後に薫が物語の主人公となることも示されているのであろう。

おわりに

従来の研究史では、横笛巻における薫の「知らず顔」は、「知らない様子」という意味で、この用例以外では人に対する「知らず顔」は、「知らぬふり」と解されてきた。

本稿では、「知らず顔」と見る他者の意識を考察した結果、他者が「知らず顔」とする場合は、他者自身の意識の変化が、根底にあることを読み取った。「知らず顔」の主体が人以外の場合は擬人化されているため、人の場合と同様に、「知らぬふり」と解釈すべきであり、そう思う人の意識の変化が投影されている。

ゆえに、源氏が薫を「知らず顔」と「見たまふ」ことから、何も知らない赤子の薫というだけではなく、未来の薫が知るかもしれないという思いで、源氏には「薫が知らぬふりをしている」と映っているとすべきである。そのように解すること、源氏の思いが、薫が知らない様子であることではなく、薫その

ものに向かっている。

源氏は、薫を柏木に似ている不義の子として、柏木と繋がつて見ていたが、柏木と切り離して独立した存在であるという意識に変わり、将来薫が真相を知ること意識していると解釈したい。

薫の「知らず顔」は、「知らない様子」ではなく「知らぬふり」と解することで、薫の将来を暗示し、薫の主人公性を付与する語句なのである。

〔注〕

(1) 「よろづも知らず顔に」について、注釈書は次のとおりである。管見では「知らず顔」を「知らないふりをする」としている注釈はなかった。

・『新編全集』何もこ存じなく

・『大系』（実父柏木の死は勿論）一切万事、何も知らない顔をして

・『玉上評釈』何も分らない顔をして

(2) 「知らず顔」の語義は、次のとおりである。

・『角川古語大辞典』知っているのに知らないふりをする

こと。また、そのような顔つき。知らん顔。

・『小学館古語大辞典』そ知らぬ顔。知らないふり。

- (3) 『歌ことば歌枕大辞典』(加藤睦氏)では、「知らない様子」と記載されている。しかし、解説に記載されている三つの用例は、そのうち二例〔後撰集・恋六・九九七・よみ人しらず〕、「(新古今集・雑下・一七六七・良経)」が人に対する「知らぬふり」である。残る一例は、「道すがら我のみつらくながむれど月は別れも知らず顔なる」(玉葉集・恋二・一四四七・雅有)」とあって、「知らず顔」の主体が「月」となっており、「知らないふり」(『和歌文学大系』の「知らぬ顔」、『玉葉和歌集全注釈』の「知らぬげな顔」という注釈を参照)と解されている。ゆえに、解説に記載されている「知らない様子」というのは、「知らないような様子」または「知らない様子をすする」という意味であろう。

- (4) 『源氏物語』において、「知らず顔」の用例は三十二例である。対象別では、人物は二十九例、植物二例、動物一例となっている。同義語の「知らぬ顔」は、本稿では別語として対象としない。(宮島達夫編『日本古典対照分類語彙

表』(笠間書院 二〇一四年、『源氏物語語彙用例総索引』

(勉誠社) 一九九四年を参照)

- (5) 『源氏物語』より前では、「知らず顔」の用例は、「うつほ物語」八、『落窪物語』・『枕草子』各二、『後撰集』・『蜻蛉日記』各一である。すべて人に対するもので(※)、そのうち「知らない様子」というのは、『枕草子』の一例であった。しかし、岩佐美代子氏が、「女はた知らず顔にて、おほどかにてゐたまへり」(新編全集『枕草子』二八頁)について、「知らず顔」が「見知らぬふう」、「知らぬが仏」、「気づかない様子」と解されていることを誤りとし、正しくは「知らないふり」であると論じられている(「女はた知らず顔にて―枕草子解釈考―」『国文鶴見』第三十六号(笠間書院) 二〇〇二年三月)。
- ※次の用例は、「知らず顔」の主体は「雛鳥」であるが、「真砂子君」を指し、「知らぬふり」という意味である。
- 巢立つことまだ知らざりし雛鳥の枝はいづれぞ知らず顔にも

- (6) 該当の用例は次のとおりである。(新編全集『うつほ物語』国譲中巻三三四頁)

・いかにせんとかなしきに、若君のかかることやあらんと
も知らず顔に何心なき御笑み顔を見るが、

(新編全集『とりかへばや物語』三九二頁)

若君に対するものであり、『源氏物語』の影響を受けた
ものであろう。

・五月雨はいとど暗れ間なく、軒の菖蒲も知らず顔にて過
ぎぬ。

(新編全集『栄花物語』卷三十三 二七〇頁)

「知らず顔」の主体は、後一条天皇の崩御を悼む女房た
ちである。『新編全集』では「軒に暮く菖蒲も氣にとめず、
わけがわからないうちに」と訳されている。「菖蒲」に
「文目」を掛けているため、知らない様子とされたのであ
ろう。

(7) 「知らず顔」の主体が人の場合は、会話文八例のうち他
者が二例、本人四例、一般対象二例である。心内文は四例
で、内訳は他者三例、本人一例となっている。地の文で
は、該当用例以外はすべて語り手の視線である。

(8) 会話文にも次のとおり二例存在するが、話し手が聞き手
を意識して使われているので、対象としない。

・院にも思さむことは、げにかたじけなういとほしかるべ
けれど、かの御遺言をかこちて知らず顔に参らせたてま
つりたまへかし。(落標卷三三〇頁)

藤壺が源氏に、朱雀院の前斎宮への想いについて源氏が
知らなかったふりをして前斎宮を入内させようと提案して
いる。

・まだ下臈なり、世の聞き耳軽しと思はれば、知らず顔に
てここに委せたまへらむに、うしろめたくはありなまし
や」など呻きたまふ。(常夏卷二一九頁)

源氏が玉鬘に交わした言葉である。「知らず顔」の主体
は内大臣で、夕霧と雲居雁との仲を知らぬふりをしてくれ
ればいいのにと、源氏は内大臣を批判している。

(9) 怒りの感情は、まず怒りの原因である対象者に向けられ
るが、次に自分に意識が向かい、その中で桐壺院のことが
浮かび上がった。これに続いて、「思へば、その世のこと
こそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例
を思すにぞ」と、自分の密通について記されている。桐壺
院の「知らず顔」を意識すれば、なぜ桐壺院が知らぬふり
をされたのか、密通についてどう思っていられたかなどに

も意識が向くはずであるが、本稿では論じない。

(10) 「知らない様子」としているのは、『大系』の「知らない様子」、『玉上評釈』の「気づかない様子」である。

(11) 『玉上評釈』は「知らず顔」、『新大系』は『新編全集』と同様に「気づかぬ風情」となっている。

(12) 『大系』は「知らない風」としている。大系頭注で「季節に合った草や木の枝に、文を結びつけるものなのに」薫は、秋の様子も知らない風に、青い枝で、一部分は、大層紅葉しているのを選んで、つけて」との記述がある。「青き枝」は薫が選んだことから、「青き枝」に薫の思いが入っていると、薫が「知らず顔」の主体となって、「知らぬふり」という解釈になったようである。佐伯梅友編『源氏物語講読 中』も「知らないふう」となっている。

(13) 大君が薫からの手紙を受け取り、薫が「秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを」としたのを「見たまふ」となっており、大君の視点と解する。

(14) 『新編全集』では用例④が「知らぬふり」、⑤は「知らない様子」である。用例④は、新編頭注で「花のあるじ」は紫の上。「鶯」に、紫の上を喪った源氏自身の孤独をか

たどる」と記されている。紫の上の死を知らない「鶯」に、知っている源氏自身の思いを重ねているために、「知らず顔」が「知らぬふり」となったのであろう。『玉上評釈』では両用例の語釈が『新編全集』の場合と逆であるが、本稿では指摘のみとする。

(15) 勅撰集では、人以外が主体の「知らず顔」は六例で、『新古今集』、『続後撰集』、『続拾遺集』、『玉葉集』各一例で、『新続古今集』二例となっている（『新編国歌大観』を参照）。以下、和歌の歌番号・本文は『新編国歌大観』に拠るが、漢字をあてて表記を改めた箇所がある。

(16) 「知らぬふり」とするものは、久保田淳氏『新古今和歌集全注釈』角川学芸出版、和歌文学大系『式子内親王集』、大系『新古今和歌集』で、「知らない様子」は、窪田空穂氏『完本新古今和歌集評釈』東京堂出版、『新古今集詳解』明治書院、新編全集『新古今和歌集』である。

(17) 奥野陽子氏『式子内親王集全釈』（風間書房）二〇〇一年十月

(18) 勅撰集において、該当の用例は次のとおりである（和歌文学大系を参照）。

「知らぬふり」とするもの

恋ひ恋ひて逢ふ夜の夢をうつゝとも知らず顔なる鐘の音
かな

〔統後撰集〕卷第十三恋三 八三三 前大僧正慈鎮

もろともになれし雲居は忘れぬに月は我をぞ知らず顔なる
る

〔統拾遺集〕卷第八雜秋 六〇二 二条院讀岐

道すがら我のみ辛くながむれど月は別れも知らず顔なる
(既出)

〔玉葉集〕卷第十恋二 一四四七 前參議雅有

「知らない様子」とするもの

つらしとや山の桜も思ふらむ知らず顔にて過ぐる春風

〔新統古今集〕卷第十六哀傷 一五六一 道命法師

見るからになぐさめかぬる心とも知らず顔なる月の影か
な

〔新統古今集〕卷第十九雜下 二〇三四 後龜山院

(19) 「知らず顔」の「知らぬふり」という意味から、知らない薫に対して、すべてを知っている人物として柏木を想起

することはない。人以外の「知らず顔」でも、擬人化によ

って動植物が「知らぬふり」をしていると意識され、知らない様子をしている主体と知っている主体は同一である。

(20) 源氏は、冷泉帝に実父は自分であることを隠し続けたに

もかかわらず、藤壺亡き後に知られてしまった。これについて、なぜ秘密が漏れたのか源氏は特定できなかった。薫については「この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし」(柏木卷三四頁)と、密通を仲介した女房がいるであろうと思っており、その女房は柏木にも近い人物のはずである。ゆえに、薫が将来実父を知るかもしれないという意識を持っているであろう。

(21) 薫は真実を知らされる以前に、幼き頃から自分の出生に

疑問を持って苦悩していたことが、匂兵部卿巻で記述されている。

(22) 倉田実氏「薫の表情——「顔」表現の反復——」『大妻女

子大学紀要 文系』二十九号一九九七年三月

(23) 手塚昇氏「源氏物語の再検討」(風間書房)一九六六年

一月

(24) 仁平道明氏「いとねちけたる色好み——薫像とその背景

——」『古代文学論叢』第十四輯(武蔵野書院)一九九七年

七月

(25) 源氏がなぜこの時点で初めて「わが御鏡の影にも似げなからず」と意識したかについては、別稿に譲りたい。